

植物ゲノム・遺伝子源解析センター 月例セミナー

とき 平成24年12月14日(金)
16時00分～17時00分

ところ 農学部 DS304講義室

題目 「日本における社会環境変化、環境負荷低減
に対応した農薬製剤技術開発の歩みとその将来展望」

講師 大河内 武夫 博士 (三井化学アグロ(株)生産統括本部)

世界人口白書(2011)によると、1950年に25億人だった人口が爆発的に増加し2011年に70億人に到達したと推計されており、21世紀末には100億人を超えると予想されている。現在でも、必要な栄養を摂取できない「飢餓人口」は世界で約9億人もおり、増加し続ける人口を支えるための食料の確保は必要不可欠である。その食糧確保のために、作物保護剤である農薬の開発は必須であるが、その際、高性能な農薬の開発は言うまでもなく、より環境負荷の少ない、より安全性の高い農薬の開発が望まれている。私たちの身近にある医薬品は有効成分と助剤からなり、有効成分が持つ効能を最大限に発揮するために、あるいは、患者が飲み易くするためにさまざまな工夫がなされ、錠剤、細粒剤、液剤、注射剤等、種々の形(製剤)に加工されている。農薬も同様であり、有効成分と助剤を混合して種々の製剤に加工されており、有効成分の薬効を最大限に発揮するために、あるいは、保護すべき作物への農薬散布をし易くするために種々の工夫がなされている。ただし、医薬製剤とは異なり、散布すべきターゲットである作物が環境中に存在し、有効成分だけでなく助剤も含めた製剤全体として環境への負荷がより少なくなるような製剤設計が望まれている。それとともに日本国内では1990年代以降、農業への後継者不足にともなう農業従事者の高齢化が社会的問題となっており、革新的な省力農薬散布技術開発が強く要望されていた。本セミナーでは、そのような社会環境変化ならびに環境負荷の低減に対応した日本での省力農薬製剤技術開発の歩みとその将来展望について語る。また、演者は1996年にドイツシュツットガルト大学(現地ではホーエンハイム大学が通称)にドイツとアメリカのプロジェクト研究のスタッフとして参画した海外留学経験があり、日本人がひとりもない街での家族(家内と1歳の乳児)との日常生活も含めた研究生活の奮闘努力と人の交流の温かさについても触れる予定である。

主催：香川大学農学部 植物ゲノム・遺伝子源解析センター

(<http://www.ag.kagawa-u.ac.jp/phytogene/index.html>)